東日本大震災から2年
「語り部」に聞く震災とその後

死者、行方不明者1万8000人余りを出した2011年3月11日の東日本大震災から2年が経過した。被災地には福島第一原子力発電所の事故など、いまだに解決していない問題も数多く残されている。こうした中、3月10日に福島県の関係者が主催して上海市内で「ふるさと復興応援のつどい」が開かれた。震災後、自らの被災経験を各地で伝えてきた村上美保子さんも会場で講演した。震災の「語り部」として活動する村上さんに、震災の経験や復興に向けた活動について聞いた。

震災の語り部として活動する
村上美保子さん

— 地震発生の2011年3月11日の状況を聞かせてください。

村上 私は福島県北部の宮城県との県境に近い新地町で、旅館「朝日館」を夫とともに経営していました。3月11日に地震が発生し、家の中のものがほぼすべてひっくり返りました。朝日館は海岸から200メートルほどしか離れていません。私は岩手県の三陸海岸の小学校に通い、津波の恐ろしさを繰り返し聞かされていたので、地震発生後すぐに「津波が来る」と思いました。新地町はそれまでに大きな津波の被害にあったことがなく、夫は「逃げなくても大丈夫だ」と言っていました。私は家の外に出て道路に地割れができるのを目撃し、津波の危険をより強く感じました。そして、渋る夫に「あなたは逃げなくてもいいから、私が逃げるのを手伝って」と言って車を運転させ、避難所に向かいました。道路には大勢の人がいて、「私たちは逃げるから、あなたたちも早く逃げなさい」と声を掛けながら車を走らせました。途中、踏切の遮断機が下りていたので、電車が止まっていることを確認して突っ切りました。避難所に指定されていたのは、海岸から2キロほどの低い場所にあった町役場でした。私は高い場所に逃げなければと思い、役場の向かいの高台にある建物に避難しました。そこにたどり着いて5分ほどしたとき「津波だ」という声を聞き、外に出ました。すると真っ黒ですごく高い水の壁が押し寄せ、あっという間に町を飲み込んでいきました。高台まで波は届かなかったので、そこにいた人たちは全員無事でした。

— 震災後はどんな生活をしてきたのですか。

村上 町役場は床上浸水し、3階が避難所になりました。そこで40日間暮らしたあと、町の総合運動公園に設置された仮設住宅に移りました。そこには110戸の仮設住宅があり、夫が自治会長を務めています。仮設住宅の住民はお年寄りが多いので、自治会でイベントを開催して、みんなが参加できるようにしています。「ここには今しか住めない。みんなで楽しもう」と呼びかけています。

朝日館には地震から10日ほどたって行きました。福島原発の事故で放射能による汚染が心配だったので、雨具と長靴、ゴム手袋に二重のマスクをつけて出かけました。朝日館は津波で無残な姿になっていましたが、看板はほとんど無傷で残っていました。それを見た私は「弁慶の立ち往生ように、最後の力を振り絞って立っているんだ。私も胸を張って生きていかなければ」と思い、涙が止まりませんでした。その朝日館の建物も、しばらくして撤去され更地になってしまいました。朝日館は明治の初めから130年余りにわたって続いた老舗旅館でしたが、夫が高齢で後継者もいないので、再開はあきらめています。

—「語り部」としてどんな活動をしているのでしょうか。

村上 特に「語り部」という肩書きで活動しているわけではありません。初めは震災の年の6月に会津若松市で医師や看護師の会合に呼ばれて話をしました。その後、学校などから講演の依頼があり、その輪が広がって次々に依頼が来るようになりました。多くの写真を使い、プロジェクターのない場所では、大きくプリントした写真を紙芝居のように使って話をしています。地震発生時に私は小学校のころ教わった津波の話を思い出し、夫とともに逃げて助かりました。子どもたちにも津波の恐ろしさを伝えなければと思い、あえて恐怖をあおり、記憶に残るように話をしています。私は5年ほど前から昔話の語りの勉強を続けてきました。震災の話を始めたとき、このために語りの勉強をしていたのだなと思いました。

— 今後はどのような活動をしようと考えていますか。

村上 私は「東北お遍路」というプロジェクトにかかわっています。このプロジェクトは、東日本大震災で津波の被害を受けた福島県から青森県までの沿岸地域に慰霊・鎮魂のためのポイントを88カ所設け、日本はもとより世界からお遍路さんを呼び込もうというものです。お遍路として訪ねてくれる人が増えれば、被災地の人たちも元気になります。プロジェクトでは震災の風化を防ぎ、震災の記憶を千年語り継がなければならないと考えています。そのためにも、話を聞きたいという人がいれば、私は日本全国どこへでも出かけて行くつもりです。

① 震災後の「朝日館」。建物は破壊されているが、看板（右上）はほぼ無傷で残っているのがわかる
② 朝日館があった場所は建物が撤去され更地となっている
③ 仮設住宅では住民が助け合って生活している

村上美保子さんのブログ「朝日館の女将のてんてこ舞日記」
http://asahikanok.exblog.jp

上海から復興を願う

3月10日の「ふるさと復興応援のつどい」には約170人が出席し、福島県の復興を願った。地震発生時刻の日本時間午後2時46分（北京時間午後1時46分）には、3・11の形にローソクが並べられ出席者が黙とうした。

会場では村上さんのほか、風評被害の払しょくに取り組んでいるNPO法人会津地域連携センター理事長の稲生孝之さんと、中国の高校生との交流の中で震災の体験を伝えようとしている福島高校1年の鈴木瑞彩さんの2人が講演した。また、震災の被害や震災からの復興の様子を伝える写真や資料も多数展示された。主催者の1つである上海福島県人会の野地義重会長は「福島県のほとんどの地域は安全で、食品もすべて検査して安全なものしか市場に出ていません。福島の本当の姿を知ってもらうことが、風評被害の払しょくにつながります。震災から2年が経過しても、生活基盤を失い働く意欲を持てない人も数多くいます。復興はまだまだこれからです」と語った。

ふるさと復興応援のつどいの会場

3・11の形に並べられたローソク

地震発生時刻に黙とうする人たち

上海福島県人会　野地義重会長

福島県上海事務所　住 延安西路2201号上海国際貿易中心1710室　021-6270-5001